

《原著論文》

## 障がいをもつ子どもたちの衣生活

——社会福祉法人西陣会タイムケア事業「ういず」での調査にみる現状と課題——

### Clothing Environment of Challenged Children

——A Case Study of “With”, a time care project of the Nishijin Social Welfare Corporation——

中 泉 恵 理  
(Eri Nakaizumi)

**Abstract** : “With”, a time care project of the social welfare corporation Nishijin Association, supports after-school hours of high school and junior high school students who attend Kyoto City Kita-sogo School for Special Education. They are physically and mentally challenged. I realized there are various problems about their clothes through taking care of their dressing and undressing, excreting, and having meals. Then, I thought it important to improve their clothing environment. So, I used a questionnaire observations and hearing investigations to parents of 26 users of “With” on their clothing environment in November 2009. As a result, the following points were clarified about challenged children. i) They often have to wear clothes for seniors because there are few made for them, ii) as for commercially available diapers, baby ones are too small and adult ones are too big for them; and iii) they often have trouble with putting on and taking off clothes even if the sizes fit them. It is also clarified that there are some cases that even children with autism and so on who have standard proportions and no physical problems have trouble with choosing and putting on and taking off their clothes. It is obvious that the problems about the clothing environment are ascribable to characteristics of each handicap or physical problem involved. However, we cannot predict difficulties in real life of children with disabilities only by classifying them into categories because each of them has different problems, and it is very difficult to comprehend their actual state only by a questionnaire investigation. To resolve these problems, it is important for people close to them to observe everything else in their life and consider the support tailored to each child.

キーワード：障がい児，ユニバーサルファッション，自閉症，脳性まひ，ダウン症

#### 概 要

社会福祉法人西陣会タイムケア事業「ういず」では、京都市立北総合支援学校に通う中高生の放課後支援を行っている。私は、子どもたちの衣服の着脱やトイレ、食事の介助を行う中で、衣服におけるさまざまな問題を実感し、障がいをもつ子どもたちのよりよい衣生活を考え

ていきたいと考えた。

そこで、2009年11月に利用者36名にたいして、衣生活に関する質問紙調査を実施し、引き続き観察調査ならびに個別の聞き取り調査を実施した。その結果、身体機能に障がいのある子どもについては①高齢者向け商品からの選択を余儀なくされる場合が少なくないこと、②市販おむつの幼児用では小さすぎ、高齢者用では大きすぎること、③衣服のサイズが身体にあっている場合でも、着脱が困難な場合が少なくないことがわかった。ま

愛知県立春日台養護学校

## 障がいをもつ子どもたちの衣生活

た、自閉症のように、身体機能に問題がなく標準体形であっても、衣服の選択や着脱に困難がある事例も確認できた。

各障がいの特徴やそれに伴って起こる身体機能障がい、衣生活上の困難に大きく関わっているものの、子どもたちが抱える問題は一人ひとり異なっており、障がい分類だけで実生活上の困難を予測できるものではないこと、ならびに質問紙調査だけで現状を把握するのは極めて困難であることが示唆された。こうした問題点を洗い出すためにも解決するためにも、身近で接するものが障がいをもつ子どもたちの生活全般を視野に入れ、個に応じた支援を考えていくことが重要である。

### 1. はじめに

「装う」ことは性別、年齢、障がいの有無にかかわらず、すべての人に共通な基本的な欲求であり、自分を表現する大切な手段の一つである。しかし、障がいをもつ子どもたちにとって「一人ひとりの目的に合った、自分らしさを表現できる衣服」や「機能的な衣服」を自由に選択・購入できる機会は決して多いとはいえない。

社会福祉法人西陣会タイムケア事業「ういず」（以下：「ういず」と略称する場合がある）では、障がいをもつ子どもたちの放課後支援を行っている。私は衣服の着脱やトイレ、食事の介助を行うなかで、衣服に関するさまざまな問題を実感することが多かったため、障がいをもつ子どもたちの衣服の現状を知り、よりよい衣生活を考えていきたいと思い研究を始めた。

### 2. 社会福祉法人西陣会タイムケア事業ういずの概要

#### 2.1 設置目的と利用状況

京都市配布、「障害のある中高生のタイムケア事業ういず利用手引き」によるとその概要は以下のとおりである。

京都市立北総合支援学校に通学する中高生がいきいきと過ごせる活動の確保とともに、その中高生の保護者の方の就労支援等を目的としています。また実施にあたっては、障害のある中高生の自立の促進や障害のある方が地域で普通に暮らすことができる社会の実現を目指したノーマライゼーションの理念を踏まえ、地域の小学校の教室を実施場所として、より多くの地域住民の方にも、話し相手、読み聞かせ、音楽・美術の指導、イベントの企画などにより事業に参加していただき、このような共通の体験を通じて、障害についての理解を深め、障害のある方

もない方も誰もが生活しやすいまちづくりを協働で推進していくこととしています。（京都市配布、2009年3月発行、障害のある中高生のタイムケア事業ういず利用手引きより抜粋）

2009年11月現在利用者数は43名。内6名は、長期休暇のみの利用である。重複障がいもあるが、自閉症が約60%、脳性まひ約20%、ダウン症約10%、発達遅滞約10%である。車椅子常用者は4名であるが、ほかにも足元が安定しなかったり麻痺がある子どもが数名いる。

スタッフの体制としては、移動、食事、トイレの介助を必要とし常に介助が必要な子どもが2名おり、それにはマンツーマンで対応している。それ以外は、子どもたち2人に対してスタッフが1人つく。平日の放課後利用は、1日15人を限度としている。

#### 2.2 これまで見てきた衣生活の現状

身体機能に問題を抱えているなかでも、衣服の着脱等が困難な子どもたちは、耐久性や機能的ななどを中心に考えたニット製のスポーツウェアのような衣服を着用していることが多い。特にオムツを使用している子どもたちは、オムツから尿が漏れることがよくある。私自身、何度も立会ったことがあるのだが、時には1日に3回ズボンを交換する。そのようなことを考えると、比較的値段も安く、持ち運びが便利な衣服を常用することになる。介助者がオムツを交換する際にニット製の衣服のほうが、脱ぎ着させるのに容易であるということも衣服選択の大きな要因になっていると考えられる。

身体的な機能には特に問題のない自閉症の子どもたちは、一般的な種々の日常衣を着ているように見える。ある保護者は「身体が不自由であったり、何かしらのハンデがあるからこそ、服で楽しませることをしてあげたい」と話した。

自閉症やダウン症の場合、靴下の右と左を逆にはいてしまったり、服の裏表が逆のまま着用するなど、同じような色や形のものであると、左右・表裏の区別がつかなくなるということは多くの子どもで見られる。その他にも、自閉症の子どもたちのほとんどは「こだわり」をもっており、白しか着ない子どもやVネックしか着ない子どもなどもある。そのこだわりは、保護者であっても変えることは難しい。特に強いこだわりを持っている子どもは、一度自分が正しいと思って行ったことに対して、他人が一方的に「違うよ、直そうね。」と声をかけるとパニックをおこしてしまう場合もある。その場合

は、間違いを指摘する前に、今どのような状態でこれから何をするのかを、絵で示したり、「この靴下逆に履いたらもっと可愛くなるんじゃない？見せて欲しいなあ。」というように、子どものリズムをストップさせないような声かけをしていくことがとても大切になってくる。また、その他の問題点として、トイレの後に下着が上がりきっていないかったり、ボタンやチャックが開けっ放しなど、細かいところに気がつかないという傾向も見られる。女の子では、中高生で始まる「月経」で問題が起こったことが何回かある。自閉症の子どもたちは、環境変化がとても苦手なため、急にナブキンをつけることに大きな抵抗みせる。介助者側が、急にナブキンをつけたため、パニックを起こしナブキンを道路で取ってしまう子どももいた。そのようなことを考えると、まず、布ナブキンで生理のときはナブキンを付けるということを理解させ、次に布ナブキンを外して交換するということを理解させる。その後、紙ナブキンを付け様子を見るなど、順を追って徐々に慣れさせることが必要である。身体的に障がいのない子どもであっても、私たちが普段何気なくおこなっている生活の中に、たくさんの壁があるということを日々実感する。

さらには、障がいの程度によっては生理機能が低下している場合がある。例えば、体温調節機能が低下している子どもは、外気に対する抵抗力が弱く暑さや寒さを感じることも鈍くなっているため、風邪を引きやすい。また、ほとんどの子どもたちは暑い寒いなどをこと言葉で表現することが困難なため、介護者側が常に空調を管理し、衣服で調整するなど細やかな気遣いが必要になってくる。

このように「ういず」の子どもたちの普段の衣服の問題は、介助している側も常に感じてはいるのだが、「衣服の問題は障がいがあるのだから困難が生じるのは当たり前」というような感じで捉えられており、表面的にはあまり問題とされていないように思える。しかし、オムツから尿が漏れて衣服を何回も交換しなければならなかったり、靴下の左右がいつも逆になってしまい、それを常に指摘されたりすることは、子どもたちにとっても辛いことであると思う。無理なくなじめるような提案をすることができれば、子どもたちの精神状態を落ち着かせ、パニックに陥るのを防ぐことができるだろう。

より快適な衣生活を送ることができるよう、まず現状を把握して解決策を探っていきたい。

### 3. 実態調査の方法と結果

#### 3.1 質問紙調査の項目と実施方法

放課後の限られた時間だけでなく、家庭や学校など、普段の生活の中での衣生活の問題点を探るため、利用している子どもたちの保護者に向けてアンケートを実施することとした。

- ・調査対象：2009年社会法人西陣会タイムケア事業利用者のうち、放課後利用者37名の保護者
- ・調査期間：2009年11月13日～30日
- ・回収方法：保護者への通信冊子によるはさみこみ回収
- ・回収率：95%
- ・調査内容：以下の調査用紙を用いた

#### 3.2 調査結果

質問紙調査の結果は個人差が大きく、集計や平均値では細かな問題点を取り上げることができないことがわかった。以下では、質問紙調査につづいて実施した、聞き取り調査ならびに観察調査結果とあわせて、5人の事例を述べる。

【事例1】：Aくん（高校3年生）

- 1) 主な障がい：ダウン症、難聴
- 2) 「ういず」での日常生活

排泄、着脱ともに自立。学校では作業活動や調理実習にも積極的に参加し、自立度は高い。知的年齢は小学校低学年程度であり、アニメのキャラクターや戦隊もの、ゲームなど自分の好きなものに固執する。気持ちに浮き沈みがあり、多少のこだわりもみられるが、自分の思いを口に出して伝えられる。

#### 3) アンケート結果

私が「ういず」でかかわった中では、特に衣生活に問題を抱えていないと思っていた。しかし、アンケート調査を行うとAくんの母親から以下の問題点が挙げられた。

上半身着	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボタンのかけ違いが起きやすく、下から止めるなどの指示が必要。</li> <li>・腕の長さが短いため、袖丈の短いものが欲しい。</li> <li>・ワイシャツは小さい上のボタンがはまらないため、だらしく見える。</li> <li>・前後を逆に着てしまうことがある。</li> </ul>
------	---

障がいをもつ子どもたちの衣生活

下半身着	・普通より足が短く、お腹回りは太いため、ちょうど良いサイズがない。 ・腹筋が弱く、寝てズボンを穿かなければならない。
下着	・なし
靴・靴下	・結びびが不得意な為、マジックテープ又はひもを結んだように見える大人向きを探すが、年相応のもの(大人用)を見つけるのは難しい。 ・足首がやわらかいので、底の厚いものを選ぶが、良いものがなかなかない。

4) 気づき

質問紙調査結果と、日ごろのAくんとのかかわりを通して、Aくんの衣生活上の困難の中には、ダウン症の子どもたちの「臨床症状」に起因するものがあることがわかった。衣生活を考える上で配慮すべき臨床症状は、頸部、筋緊張低下、四肢である。

塩野寛著, ダウン症候群<sup>2)</sup>では以下の臨床症状が挙げ

られている。①頸部…頸は短く、幅広い。頭毛の付着部が比較的低位に位置している。②筋緊張低下…全身の筋緊張低下は本症候群の新生児、乳児期ではほとんどの症例に著明であり、年齢とともにこの症状は消失するが、まれに学童期以後でも残っている場合がある。③四肢…手は全体として小さく、幅広い。指も短く太い。足および趾は手と同様に短く、幅広くしばしば扇形を呈する。

これら臨床症状と衣生活との関連を考えるとつぎのとおりである。頸部が短く幅広い症状がみられる場合は、市販のものでは首回りが小さく、Aくんのようにワイシャツの上ボタンがしまらないという問題が起きる場合がある。また、筋力が低下している場合は、お腹回りが普通よりも太くなり、お腹回りに合わせるとズボン丈が長いなどの問題が起きる。これらの問題は、Aくんとともに衣服を購入する場に立ち合わなければわからない問題であった。この質問紙調査後、「ういず」でAくんの衣服を観察したところ、実際に袖やズボンの裾を折り曲げて着用していた。Aくんの母親によると、ズボン

各位 2009年11月12日  
アンケート調査ご協力をお願い

いつもお世話になっております。タイムケア事業ういずで非常勤職員として働かせていただいております。同志社女子大学4回生の中泉恵理と申します。  
この度のアンケートでは、ういずを利用していただいております子どもたちの現状や問題点をお聞かせいただき、よりよい衣生活を研究する上での参考にさせていただきたく、ご協力をお願いいたしました。来年度から支援学校の教員として働くことが決まり、この卒業研究を通して支援学校に通われる子どもたちのよりよい生活支援のあり方を考えていきたいと思っております。  
皆様ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが、何卒ご協力の程お願い申し上げます。なお、ご記入いただきました内容については、個人情報を多く含みますが、個人研究以外では使用いたしませんのでご了承下さい。  
\*今回の配布対象者は、放課後利用の方を対象とさせていただきます。ご了承下さい。

1. はじめに

以下の設問に対して、該当するものに○印、または記入して下さい。

(1) 記入者	父 母 祖父 祖母 兄弟姉妹 本人 その他( )
(2) 性別	男 女 *お子様の性別に○印を付して下さい。
(3) 年齢	( ) 歳 *2009年11月現在のお子様の年齢をお書き下さい。

2. 衣生活について

以下の設問に対して、該当するものに○印、または記入して下さい。

\* (1)着脱、一部介助が必要に○をつけた方は、どのような介助が必要か( )に記入して下さい。

上半身着	(1) 着脱	全部自分で行う ( ) 一部介助が必要 ( ) 全面的な介助が必要
	(2) その他	・着脱やデザイン、機能性などで不都合なことがあれば、なるべく具体的にお書き下さい。 例) 裏面逆に着てしまう、袖を通しにくい等 ( )
下半身着	(1) 着脱	全部自分で行う ( ) 一部介助が必要 ( ) 全面的な介助が必要
	(2) その他	・着脱やデザイン、機能性などで不都合なことがあれば、なるべく具体的にお書き下さい。 例) 裾が長くてすってしまふ、チャックが下げにくい等 ( )

下着	(1) 着脱	全部自分で行う ( ) 一部介助が必要 ( ) 全面的な介助が必要
	(2) その他	・着脱やデザイン、機能性などで不都合なことがあれば、なるべく具体的にお書き下さい。 例) オムツの尿もれ、かぶれやすい、ナプキンに慣れない等 ( )
靴下・靴	(1) 着脱	全部自分で行う ( ) 一部介助が必要 ( ) 全面的な介助が必要
	(2) その他	・着脱やデザイン、機能性などで不都合なことがあれば、なるべく具体的にお書き下さい。 例) 左右逆になってしまう、サイズの合うものがない等 ( )

3. 衣服の購入について

(1)衣類の選択や購入は、だれがどのようにしますか。下記の例を参考にお書き下さい。

例) 本人と販売店に出向いて選択して購入する。家族などが選択、購入する。

4. おわりに

アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。もし、可能であれば直接お話しをお聞かせいただき、ご一緒に問題点を改善していくことができればと考えております。日常着のこと、卒業式の晴れ着のことなど、どのようなことでも構いませんので、お話しいただける方は以下のメールアドレス、FAXにお送りいただくか、差し支えなければ連絡先をお書き下さい。

同志社女子大学 被服学研究室  
人間生活学科4回生 中泉恵理  
メールアドレス: shu063@dwv.doshisha.ac.jp  
研究室 FAX: 075-251-4222

アンケートは以上です。  
ご多忙のところ誠に申し訳ございませんが、11月中に封筒に入れてご提出お願いいたします。

は裾をつめてもらうことができるため、ある程度着やすいものを購入できるが、袖丈はつめることが難しいため、曲げて着るしかなく、どうしてもだらしく見えてしまうのが悩みであるとのことであった。また、A くんは知的年齢は小学生低学年程度であるため、衣類を選択購入する際、本人が選択するものはアニメのキャラクターが多く、年相応のもの（大人用）を成長に合わせて購入したい保護者との意見の食い違いがみられることも悩みであることがわかった。

【事例 2】：C くん（高校 1 年生）

1) 主な障がい：自閉症

2) 「ういず」での日常生活

排泄、着脱はともに自立。コミュニケーション能力が低く、自分の思いを言葉で伝えることはできない。こちらが指示するときは単語で指示を行うか、絵カードを使用。常同的で反復的な全身運動があり、一つまたはいくつかの興味だけに熱中することが多い。

3) アンケート結果

上半身着	・バックプリントの服を嫌がる。(着ることを教える時に、前を目印にしたため、後にプリントがあることが許せないようである。)
下半身着	・体操服などは、ボタンやファスナーがないので前後がわかりにくい。
下着	・トランクスでないと嫌がる。 ・赤色しか着ない。赤色でないものはわざわざ赤色に着替える。
靴・靴下	・靴下はきちっと上まで上げないと気がすまない。 ・すぐにかかとをふんでしまう。注意すると直す。

4) 気づき

C くんはこだわりがとても強く、それは衣服に関してもいえる。普段から C くんは衣服や靴下には赤色が多いのであるが、これは C くんはのこだわりからきているということがこの調査でわかった。

保護者は、服を着るということ覚えるときに、絵やボタンがある方を前と教えていた。これは抽象的なものを理解しにくいという自閉症児<sup>3)</sup>の指導に有効とされる方法である。抽象的なものを視覚的に理解しやすいものに置き換えて判断させ、理解させるとするのは一般的な自閉症児の指導方法の一つであり、多くの学校や家庭で

はこの方法で日常生活の指導を行っている。しかし、プリントやボタンがあるものを前と理解している C くんは、それと異なった衣服（バックプリントのものや、体操服などの無地のもの）には対応できない。子どもにとってわかりやすいはずの視覚的な手がかりの活用が、自閉症の子どもにとって、応用がきかないという問題を生んでしまっているのも事実である。

【事例 3】：自閉症の D さん（中学 2 年生）

1) 主な障がい：自閉症

2) ういずでの日常生活

排泄、着脱ともに一部介助が必要。こだわりは強い方ではないが、自分の思いと異なることが起こると、他傷行為や回避行動（床に寝そべり動かない）ができる。D さんは自閉症であるが、言葉での指示によってパニックを起こすことはなく、こちらの言葉がある程度理解することができる。興味の幅が狭く、新しい環境が苦手である。

3) 調査結果

上半身着	(一部介助が必要：前後をよく間違うため声かけをしたり、最後の整えの手伝いが必要。脱ぐのは一人で行える。) ・表裏、前後逆に着たり、袖がどこかにひっかかったりすると、自分ではどうなっているかわからない。 ・ボタン、ホックのある服は全くできないので、できるだけボタンの無い服を探して着せる。 ・脱ぐことはできるが、脱いだ服を整えないため、それをもう一度着る場合には表裏を整えなければならない。
下半身着	(一部介助が必要：前後、裏表声かけが必要) ・ボタンやファスナー、ベルトは自分でできないため、できるだけ無いものを選ぶ。 ・上半身着の脱いだ後と同じ。
下着	(一部介助が必要：下着は穴がわかりづらいため、入り口、出口を間違 うことが多く声かけが必要。脱ぐことは一人でできる。) ・前後がわかりにくい。足を入れる所を間違えてもそのまま履いてしまう。 ・生理の時、ナプキンは外せるがつけることができない。

障がいをもつ子どもたちの衣生活

靴・靴下	(一部介助が必要：左右逆、またはかかとの位置がずれて、つま先の方にソックスが余っていたり、甲の方にきていたりする事があるため声かけが必要。) ・靴・靴下ともに左右逆に履く。 ・片足を上げることが苦手なため、すべりにくい靴下は履きにくい。
------	--

下着	・なし
靴・靴下	・マジックテープの靴を履かせていたが、サイズが大きくなったら、高齢者が履く様なデザインしかない。紐靴にしたいが、紐結びは出来ないため、現在は紐がほどけないようにしたり、着脱できるように調節して履かせている。

4) 気づき

Dさんは、介助する側の言葉を理解することはできるが、指示をしなければできないことが多い。そのため、介助する側が常に注意しておく必要がある。

ナプキンの付け外しは、自閉症の女の子に限らず多くの障がいをもった子どもたちが苦手としている。外すことはできるが、ナプキンをちょうど良いところに付けることができず、前後どちらかによってしまったり、折れ曲がってしまい経血がもれてしまうことがある。私たちの場合、たとえ自分が思っていたところに付けることができなくても、下着をあげて違和感があったら、再度調節することができる。しかし、Dさんのような障がいをもつ子どもたちは、下着をあげてしまったりナプキンがずれていたたり、折れ曲がっていてもそれを直すことはできない。そのため、子どもたちが下着をあげる前に介助者がナプキンの位置を確認しておくか、下着にナプキンを付ける場所を示した印を付けておく必要がある。

【事例4】：自閉症のEくん（高校2年生）

1) 主な障がい：自閉症

2) 「ういず」での日常生活

排泄、着脱ともに一部介助必要。こだわりがあり、一つまたはいくつかの興味だけに熱中する。「トイレ」など、自分の思いを単語で伝えることもあるが、言葉のオウム返しが多く意思疎通は不完全である。

3) アンケート結果

上半身着	(一部介助が必要：ボタンの付いている服) ・カッターシャツやファスナーの付いている服は着にくいので、トレーナーなどを着せている。
下半身着	(一部介助が必要：チャックなどの付いてるズボン) ・足が太く、お腹が出ているため、半ズボンの場合は良いが長ズボンは 胴に合わすと裾が長くなり、ズボンの幅も太くなり不細工になるため、なかなか良いものが探せない。

4) 気づき

【事例5】：脳性麻痺のFくん（高校1年生）

1) 主な障がい：脳性麻痺

2) 「ういず」での日常生活

排泄、着脱ともに全面的な介助が必要。脚と指に麻痺がある。介助用の車いすを使用。簡単な発言はできるが、意思疎通は不完全といえる。

3) アンケート結果

上半身着	・アームホールの小さい衣服に袖を通すことが困難。
下半身着	・足の長さに合わせてウエストがゆるく、サイズのちょうどよいものを探すのが難しい。 ・ウエストがゴムのものを選ぶと、ジャージばかりになってしまう。
下着	・横向きに寝ると、オムツから尿漏れがおきる。
靴・靴下	・足首の力がなく、サイズが合っても履かせやすいものがない。

4) 気づき

私は女性であるため、Fくん衣服の着脱の介助は上着だけである。Fくんは上半身には麻痺がなく、関節の拘縮もないため一見困難はないように思える。しかし、実際介助をしてみると麻痺がなくても、アームホールの小さい衣服に袖を通すことは難しい。「ういず」ではFくんの上着の着脱は、車いすに座った状態で行うことが多い。片腕にまず袖を通し、体を前に倒させ背中衣服を整えもう一つの袖に腕を通すのだが、この際、ひじで服がたまってしまい、そこから上にあげるのが無理やりになってしまうことがある。車いすに乗っていない状態であれば、両手を後ろに回し、両そでを一気に通して着せるという方法もあるのだが、腕に力をいれて位置を固定することが困難なFくんにとって、この方法も最善であるとはいえない。そのため、Fくんの母親は「学校の先生や、ういずで介助をしてもらう際、介助をしてもらう人に少しでも迷惑をかけないようにと、袖の大き目の

ものやジャージを着用させているが、本当は普通の高校生の男の子が着るようなジャケットやコートを着せたい」と話した。

また、Fくんは脚に麻痺があり歩行したり、立位を保つことができない。そのため脚は普通よりも細く、お腹回りも細いと考えられる。車いすから床へ移動する際の持ち上げで、ズボンがずれてしまうことがあるが、介助の際不便なためズボンにベルトをすることはないのである。保護者はズボンがずれ落ちるのを防ぐために、ウエストがゴムのもを着用させることが多いと話していたが、ジャージ製のものしかなく、デザインや素材が限られることが悩みであると話した。靴については、自閉症の考察で書いたことと同様の悩みをもっていたことがわかった。

#### 4. 考 察

##### (1) ダウン症の子どもに関する考察

「ういず」には、ダウン症の子どもが2人いるが、2人とも自立度は高く、声かけをすれば身の回りのことをほぼ自分で行うことができる。2人の体型は類似しており、アンケート結果も同じようなものが得られると考えていた。しかし、もう1人のダウン症の男の子（以下Bくんとする）と比較してみると、AくんとBくんのアンケート内容は全く異なるものであった。これは、Bくんの日常着がジャージであるため調査結果が全く異なったということがわかった。つまり、二人に共通していた衣服の前後の識別が難しいという問題は、ジャージであってもそれ以外の衣服であっても起こりうる問題である。しかし、ダウン症特有の首回りが太いことによる、ワイシャツのボタンがしまらないという問題は、トレーナーやTシャツでは起こりにくい問題である。このように、衣服の選択購入を家族が行う二人の場合、介助者の意向に影響を受けやすいため、それにより異なった衣生活上の困難が生じることがわかった。

##### (2) 自閉症の子どもに関する考察

自閉症の子ども19名のアンケート調査結果では、以下の回答が多くあげられた。

###### ①上半身着

- ・前後がわかりにくい場合は逆に着てしまう。
- ・ボタンやファスナーがある服は、着脱が難しいためトレーナーやTシャツばかりになる。
- ・ボタンの掛け違い。

###### ②下半身着

- ・サイズを合わせるのが難しい
- ・ファスナー、ホック、ベルトはトイレ時の着脱が困難なため、ウエストがゴムのもを着せるが、ウエストがゴムで大人用のものはジャージしかない。

###### ③下着

- ・表裏逆に着てしまう。
- ・素材や色に対するこだわりがある。

###### ④靴・靴下

- ・靴下の上下を逆にはいてしまう。（かかとの部分が上にくる）
- ・靴は中高生のサイズになると、紐靴が主流になってくるため着脱しにくい。格好良いデザインやブランドにはマジックテープ付きの靴がなく、高齢者向けのものになってしまう。

身体的な障がいをもっていない自閉症の子どもたちは、衣服の着脱は自分で行うことが多い。しかし自閉症の子どもたちにとって、服の前後や表裏は印などがついていないと理解することが難しく、逆に着てしまうことは非常に多い。これは抽象的なものを理解しにくい自閉症の特性から生じる衣生活上の困難であると考えられる。また、アンケートの中に下半身着（特にズボン）はウエストがゆるく、サイズの合うものがない、という回答もよくみられた。しかし、身体的に障がいをもっていない自閉症の子どもたちは、障がいのない中高生と体型は大きく変わらないはずである。なぜ、サイズが合わないと回答する保護者が多いのかと思い、自閉症の子どもたちが着用しているズボンやスカートに着目してみた。その結果、「ういず」を利用している自閉症の子どもたち全員がベルトをしていないことがわかった。つまり、私たちは多少ウエストがゆるくてもベルトで調節することが多く、市販されているズボンもベルトをすること前提として、少しゆとりをもって作られていることが多いように思える。しかし、ベルトの着用が困難な子どもたちは、サイズがぴったりのものでなければズボンが下がってしまったり窮屈だったりしてしまう。そのため、サイズの合うものがないと回答する保護者が多かったのではないかと考える。

また、靴に関する問題点として多くあげられたのが、紐靴は着脱しにくいいためマジックテープの靴にしたいが、良いものがないという回答であった。「ういず」の自閉症の子どもたちを見ていると、紐靴を履いている子は約6割。しかし、その多くが靴のかかとを踏んではいない。何度か注意をし、改善できないかと試みてはい

るものの、注意したときしか直すことができないというのが現状である。マジックテープの靴を履いている子どもたちを見てみると、最初にテープを外して履くということを教えれば、テープを外せば容易に靴を履くことができるということを理解し、かかとを踏んで履くことはほとんどない。つまり、私たちが何気なく行っている、紐靴のかかとをひっぱって履いたり、紐を結びなおすという行為も、自閉症の子どもたちにとっては難しいことなのである。自閉症の子どもたちをあまり知らない人たちは、ただ単にだらしないだけではないかと思う人もいるかもしれない。けれども、幼児の靴を思い起こしてほしい。小さい子どもたちの靴にはマジックテープがついているものが多い。これは、結びがまだできない幼児のため、または手伝う人が着脱させやすいなどの理由から、幼児靴ではマジックテープのものが多く販売されている。知的年齢が低い自閉症の子どもたちにも同じことがいえるのである。幼児がそれぞれの年齢に合わせてマジックテープの靴を履くのと理由で、自閉症の中高生にも知的年齢に合った靴選びが必要なのである。しかし、現状としてはマジックテープの靴の多くは、幼児向けか高齢者向けのものが多く、高齢者向けのものはデザインがとても地味で、保護者が中高生の子どもに履かせようとは思えないようなものばかりであった。私はこの調査を行うまで、保護者が靴を選択購入することに関して不都合に感じていることに気付かなかったが、靴に限らず衣服全般で多くの保護者が、選択購入の際に不都合を感じていることがわかった。

### (3) 脳性麻痺の子どもたちに関する考察

「ういず」には脳性麻痺の子どもが3人おり、内2人は車いすを使用している。2人とも立位を保つことはできないが、麻痺は比較的ゆるい方である。そのため、今回の調査ならびに、「ういず」で2人を介助する男性職員に話を聞いても、介助する側が感じる衣生活上の困難は思っていたよりも少なかった。2人に共通していたことは、オムツの尿漏れと、自閉症の子どもと同様、紐靴は着脱しにくいいためマジックテープの靴にしたいが、良いものがないという回答であった。

また、オムツの尿漏れについて母親に詳しく話を聞いたところ、オムツは乳幼児と高齢者向けのものがほとんどで、高齢者向けのSSサイズでは大きく、幼児向けのLサイズでは小さくちょうど良いサイズがないとのことであった。私の家の近くのドラッグストア<sup>4)</sup>で中高生向けのものがないか調べてみたが、乳幼児向けのものと、

高齢者向けのものしか置いてなかった。その後インターネットで商品検索したところ、最近では小学生高学年～中高生の学童用に「スーパー BIG サイズ」という商品も発売されていることがわかった。これは夜尿症対策のほか、心身障がい児の介護用としても考慮されてつくられているもので、パンツタイプの他にテープ止めタイプのものもあった。しかしこの商品も体重18kg～35kg向けであり、中高生の体形に合ったものは見つけることができなかった。「ういず」ではオムツを使用している子どもが8名いるが、そのうち5名の保護者が、サイズが合わないと回答していた。オムツ使用者の中の、障がいをもつ中高生の数は全体数からみたら少なく、消費量が少なければ、企業にとって商品開発するメリットも少なくなる。例え商品開発されたとしても、値段が高かったり、機能が良くないという問題も起こりえる。そのため、企業だけに頼るのではなく、当事者やそのまわりの人が現状を理解し、工夫をすることによって、障がいをもつ人の生活をより快適なものにしていく必要があると考える。

### (4) 衣服の購入について

衣類の選択や購入をだれがどのようにするかアンケート調査を行った。その結果、本人と販売店に外向いて選択購入するという回答と、家族などが選択購入するという回答は約1:2となった。しかし質問紙調査のあとに聞き取り調査を重ねると、下半身着のみ本人と購入するという回答や、一緒には行くが子どもは全く興味を示さないなどの回答もあり、質問紙の回答に示された数値のみから衣生活の現状と類推することには大きな限界を感じた。

障がい別に考えてみると、自閉症の子どもたちの多くは、家族が選択購入したものを着用することが多いことがわかった。自閉症の子どもは自分の意思で選択することを苦手としていることが多い。そのため、衣服を選択する際も、最後の二つまで家族が絞りその中から一つを子どもが選択するという回答が多かった。また、他傷行為や叫び声などをあげるため、店舗につれて行けないという家族も多くいた。他人に迷惑をかけたくないという家族の思いと、周りの理解が少ないことが店舗に外向くことができないという状況を作っているのである。

保護者の中には、いまだきの中高生が着る衣服を購入したいが、若者が購入するファッションビルなどに大人一人で行くのが恥ずかしく、結局小さいサイズのおとな用のものを着せているという回答もあった。この思いを

持っている保護者は多く、そのため通販やネットショッピングが重宝されていることもわかった。

### 5. おわりに

私は大学生になり初めて障がいをもつ子どもたちとかわりをもった。約2年半、障がいをもつ子どもたちとかわってきたが、今すぐ自分が何とかしなければならぬという衣生活上の困難はあまり感じる事がなかった。もちろん、オムツの尿漏れや、衣服の着脱の介助など不都合だと思うことは何度かあったが、障がいがあるのだから困難が生じるのは当たり前というような感じで捉えていた。しかし、今回の調査を行う中で、「ういず」の中だけでは見えてこない衣生活上の困難を知ることができた。例えば購入時の困難である。「ういず」を利用する子どもたちの多くは、自分で衣服を選んだり、購入することを苦手としており、保護者が衣服を選択購入する場合は多い。そのため、中高生向けの衣服を販売している店に保護者が足を運ばなければならず、保護者だけで購入するのが恥ずかしいと感じる人や、流行りがわからない、本人が試着を行えないためサイズを合わせるのが難しいと感じる保護者も多くいた。このようなことは、衣服を購入する場に立ち会わなければわからない衣生活上の困難である。また、質問紙調査の後、生活介助を行いながら問題点をしぼって観察調査をし、理解できない点を保護者に聞き取り調査を行うことで理解できたこともあった。その中の一つに、「ういず」の子どもたち全員がベルトをしていないということがある。「ういず」の子どもたちの多くがベルトやホック、ボタンの付け外しを苦手としており、トイレ時の着脱を考えてベルトはしていない。そのためサイズがピッタリのものでなければズボンが下がってしまったり、窮屈だったりしてしまうのである。

このように、保護者たちは私が予想もしないような衣生活上の困難を感じており、それは子どもたちとどのような場面で、どのように関わるかによって変わってくるものである。

人間は十人十色であるように、障がいをもつ子どもたちの衣生活上の困難も様々であり、障がいの種別のみで分けられるものではなかった。ユニバーサルデザインという言葉が広まってきている昨今であるが、誰もが装いを楽しめる社会というにはほど遠い現状である。現在のファッション商品の企画、生産・販売体制は、障がいをもつ子どもたちにとって、平等に衣服を選択できる市場であるとはいえない。大量生産大量消費型の社会の中で、

縫製に関する技術は国民一般からは遠いものになりつつあるので、標準や規格から距離のあ障がいをもつ子どもたちの困難を解消することは個人や家庭のレベルでは不可能に近い。本当に個の必要に応じたモノづくりというのは、障がいをもつ人の生活全般を視野に入れ、一人ひとりと真剣に向き合って初めてできることである。

この研究を通して、障がいをもつ子どもやその保護者の思いを知り、今後子どもたちに何を返していくことができるのか考えることができた。私は特別支援学校教員として、子どもたちやその家族の視点に立って、より快適な生活のための提案を発信していきたい。

### 注

- 1) 2007年8月から2008年4月までの間は、ボランティアとして、2008年4月から2010年2月までの間は、週3回の非常勤職員として在籍した。
- 2) ダウン症候/塩野寛・門脇純一/株式会社南江堂/1987年5月1日
- 3) 自閉症教育実践ガイドブック～今の充実と明日への展望～/独立行政法人国立特殊教育総合研究所/株式会社ジーアス教育新社/2003年6月18日
- 4) 調査店舗：京都市堀川今出川ダックス、京都市百万遍ダイコクドラック

### 参考資料

- ・こんなおしゃれがしたかった～高齢者・障害者のよそおい/小澤洋子/一橋出版株式会社/2001年10月20日
- ・高齢者・障害者の被服/渡辺聡子/一橋出版株式会社/2000年11月1日/p 84～p 93
- ・標準理学療法学日常生活活動学・生活環境学/鶴見隆正/株式会社医学書院/2001年2月15日
- ・障害臨床学/中村義行・大石史博/株式会社ナカニシヤ出版/2003年4月1日
- ・自閉症教育実践ガイドブック～今の充実と明日への展望～/独立行政法人国立特殊教育総合研究所/株式会社ジーアス教育新社/2003年6月18日
- ・ユニバーサルファッション～だれもが楽しめる装いのデザイン～/田中直人・見寺貞子/中央法規出版株式会社/2002年12月20日
- ・ダウン症候/塩野寛・門脇純一/株式会社南江堂/1987年5月1日

(2010年11月30日受理)